

詩 集

ふるさとの駅

小 松 嘉 代

大宮詩人叢書

小松 嘉代（こまつ かよ）

- 1937年生れ
- 大宮詩人会会員
- 「林道」同人
- 現住所 〒362 上尾市西上尾第二団地2-27-104

---

小松嘉代詩集 ふるさとの駅〈大宮詩人叢書第3期⑬〉

---

平成2年4月20日発行

著 者 小松嘉代

発行者 宮澤章二

発行所 大宮詩人叢書刊行会

大宮市上小町209（〒331）山崎方  
電 話 048-641-2717 振替 東京 2-139230

編集者 山崎 馨・廣瀧 光

制 作 麗文社 大宮市三橋4-122-3  
電 話 048-623-8417

印 刷 中沢印刷株式会社

---

定価 1,000円

詩 集

ふるさとの駅

小 松 嘉 代



ふるさとの駅  
目次

|         |    |
|---------|----|
| 五月のふるさと | 8  |
| 白浜で     | 10 |
| 二月の雪    | 12 |
| 栗餅      | 14 |
| ふるさとの駅  | 16 |
| 雑木林     | 18 |
| 剣道      | 19 |
| トンボ     | 20 |
| 彼岸      | 22 |
| おとらおばさん | 24 |
| 悪女      | 27 |
| 夏の草原で   | 28 |

麦畑

30

花の噴水

32

すみれ

34

紺の背広

36

静かなひなの日

38

カラス

40

振り向いた眼

42

蛾

44

髪

46

鈍行列車

48

あとがき



ふるさとの駅

## 五月のふるさと

若葉の季節

唐松林の芽

遠くで鳴くうぐいすの声

渡る風

みんなすきとおる若葉色

人は忙しく田植をする

つばめは軒下と泥田をせつせと行き交う

藤の花は紫の房を風にゆらせ

土手の桜草も花を開く

おばあさんがのびた蔭を抜く

五月の食卓は山菜のごちそう

ぼたんの花も

しゃくやくも

庭の花も五月

山にはおきな草おきなぐさ

くまがい草がひっそりと咲く

## 白浜で

青い海

あさの太陽に光る波

海は静かに海女達を吸い込んで行く  
半透明な海底で小さく 強く 泳ぎ  
海流との戦い

ゆらゆらとゆらぐ海草

静かな波のずうつと下で

白い磯着と命綱に守られて

海女はあわびを手にする

やがて

ヒュー ヒュー と海女達の磯笛が

白浜の磯に流れる

## 二月の雪

雪が静かに上尾の街を染めて行く  
白の世界に石仏だけが浮き上がり  
私は眼を閉じて手を合わせる

電柱のはだか電球はにぶく 粉雪だけが闇に光る

“明日の朝はやむかなあえ”  
あした

“大丈夫さあ”

信州の二月八日の朝は忙しい

母は夜も明けないうちに起き

かど口で赤とうがらしと粃殻を燃やす

厄除けの煙は家々の願いを冬空に運ぶ

父母はついた餅を重箱に入れて子供達に渡す

村の四辻にある道祖神に行き

重箱いっぱいに広がった餅を小さくちぎり

一つずつ石仏に付けて歩く

終って拝む頃には

子供達の息だけが白く残る

今年一年無事でありますように

健康と豊作を祈る

二月八日 「ことようか」<sup>※</sup>

雪が静かに降る日

ふるさとの思い 私は祈る

※ことようか……二月八日の信州の行事の一つで、良いお嫁さん、

お婿さんに恵まれるといわれ、子供達が道祖神に餅を供えに行く。

## 栗餅

デパートの地下で栗餅を売っていた

「奥さん奥さん 栗餅なんて今時食べられませんよ」

「昔は貧乏人 今は金持が食べるんですよ」

売り子の大きな声

祖母は栗蒔きの日 私を連れ畑に出た

“あの山の雪が牛の寝ている形になったら蒔くんどうぞ”

車山の残雪は牛の彫刻になっている

うねを作り種を蒔いて歩く祖母

その後を芝で作った板を引いて歩く私

粟の穂は二十センチ程にも大きくなり

穂先の丸いのはうるち粟

先の分かれた猫足と言われる餅粟

好きではなかった粟餅が

懐かしい黄色で

私の胸を染める